

メリメと中世再認識

—— メリメの合理主義に関する一考察 ——

宮 内 達 夫

序

メリメの文学はいかにも明晰である。それは、現実を理性によって分析し再構成する明晰さであって、そこには曖昧なところが見られないのである。ただ、この明晰さは、メリメと読者に共通の論理を前提としていると思う。それは「フランス語は明晰な言語である。」という命題を成立させているのと同じ論理だと考えられる。その意味でメリメは模範的なフランス語で書いたと言えよう。これはまたフランスの伝統とされる合理主義とも関連してくる問題である。メリメはロマン主義運動の最盛期に成人し、自らもロマン主義の闘士として文壇に入った。しかし、もしロマン主義が脱理性に対する指向だけを意味するならば、メリメをロマン主義者と呼ぶことはできないだろう。メリメはロマン主義の時代にあっても合理主義者でありつづけた。そしてメリメに対する評価は、この合理主義の解釈に左右されると思えるのである。

メリメの文学は後世に大きな影響を与えなかった。そしてメリメ自身も新しい文学の流れを理解しなかった。この事実はメリメが合理主義者であることと無縁ではない。メリメは1830年にスタンダール宛の手紙で『赤と黒』について、⁽¹⁾

Il y a dans le caractère de Julien des traits atroces dont tout le monde sent

la vérité, mais qui font horreur. Le but de l'art n'est pas de montrer ce côté de la nature humaine. (C. G. Vol. I pp. 83-84)

と言っている。また、晩年の1869年には、フロベールを、

La grande tendance est à chercher le petit en tout, à produire le bizarre au lieu du beau. et le sale au lieu du naturel. Lisez, [...] le dernier roman de M. Flaubert, où il y a partout du talent, mais qui, [...] s'est jeté dans cette mer d'iniquités. (C. G. Vol. XIV p. 697)

と断じ、ボードレールについては、

Baudelaire était fou! Il est mort à l'hôpital après avoir fait des vers ... qui n'avaient d'autre mérite que d'être contraire aux mœurs. (C. G. Vol. XIV p. 531)

と手厳しい。以上の言葉に見られるように、メリメは人間の持つ暗い部分を描こうとする文学を否定し続けている。しかし筆者はメリメの不明を咎めようというのではない。このことはメリメの合理主義の内容と関連していると考えられるのである。

ところで、この合理主義は、ロマン主義運動の大きなテーマのひとつであった中世の再認識において重要な役割を果たした。1834年に歴史記念建造物総監督官となったメリメは、中世美術を神秘性や宗教性によってではなく、合理性によって評価するために努力したのである。この分野での活動にはメリメの合理主義の特徴が最も明確に表われている。本論において、筆者は、メリメのこの面での研究の第一歩として、歴史記念建造物総監督官という役職創設の背景を概観し、ついで、メリメの *Essai sur l'architecture religieuse du moyen âge particulièrement en France*⁽²⁾ という論文を検討することで、メリメの合理主義的中世解釈の基本的な性格を明らかにしてみたいと思う。

I. 歴史記念建造物総監督官 (Inspecteur général des Monuments historiques) 創設の背景⁽³⁾

十九世紀フランスのロマン主義者達は、彼らの文明の起源を古典古代ではなく中世に求めようとした。祖国の過去を目の当りにしたいと願ったのである。歴史への関心は十九世紀前半の時代精神の表現であった。しかし、同じ過去に対してでも、立場が変わればその持つ意味もおのずと変わってこざるを得ない。フランス革命の敗者である貴族達にとって中世は栄光の時代であり、中世崇拜と革命への憎悪は表裏の如きものであった。一方、勝者であるブルジョワは自分達の政治上、経済上の権利の由来を中世に求めようとしたのである。フランスロマン主義における中世の意味を理解するためには、この両側面とも重要であるが、本論では主にブルジョワ自由主義者の中世観を検討する。

革命当時破壊の対象となった古文化財の保護を要求する声は、中世趣味の普及とともに高まっていった。ウォルター・スコット流の歴史小説が流行し、歴史趣味が広まってゆくと、祖国の過去の栄光、英雄達の思い出を刻み、昔のままのフランスの風土に溶け込んだ中世の教会堂や古城の美を賞讃する、という評価の方式が生まれた。Taylor 男爵の *Voyages romantiques et pittoresques dans l'ancienne France* に載ったリトグラフは、そのような趣味に視覚的な満足を与えたのである。これと並行して、Alexandre Lenoir,⁽⁴⁾ Alexandre de Laborde そして Arcisse de Caumont 等による、学術的な中世美術へのアプローチもあった。そしてシャトーブリヤンやユゴーは、反ヴァンダリスムの論陣を張っていた。

1830年の七月革命で自由主義者達が権力の座に着くと、国が古文化財の保護に本格的に介入する。学者や文学者の努力によって再認識されつつあった中世文化財の保護事業は、体制イデオロギーとなった自由主義にとっても、革命と

伝統の調和という主張の格好の宣伝の場であった。ギゾーは1830年10月21日付の国王宛の報告書の中で、歴史記念建造物総監督官という官職の創設を進言している。そこに述べられているこの監督官の任務の主なもの、フランス全国の巡察、記念建造物の実地調査、関連する古文書などの所在の確認、各自治体の保護事業の指導、各地方の研究者との接触および通信員 *correspondant* の人選、通信員制度の確立による古文化財リストの作製への参与などであった。⁽⁶⁾ この提案は承認され、1830年10月に Ludovic Vitet が初代総監督官に就任し、メリメは1834年5月に Vitet の後任としてこの職に就く。

ロマン主義運動が華々しく展開された1820年代に青春時代を過ごしたメリメは、Delécluze のサロンの友人達や、グローブ紙の論客達から影響を受ける。⁽⁶⁾ 周知のごとくメリメが *Le Théâtre de Clara Gazul* を発表して好評を博したのは Delécluze のサロンにおいてであったし、前述の Vitet もギゾーもグローブ紙に寄稿していた。この時の人脈が歴史記念建造物総監督官メリメを生んだのである。そして、革命と伝統の調和を求める中庸主義、歴史への強い関心、感傷を嫌い理性を重視する態度などが、自由主義者達の共有する精神であり、それがまたメリメの思想の特徴でもあり同時に古文化財保護実践の為の指針ともなった。

1830年の革命後次々と政府の要職に就いていった自由主義者の友人達と同様に、法学士の資格を持っていたメリメも1831年2月に官職を得る。⁽⁷⁾ そしてメリメの総監督官任命が *Le Moniteur Universel* に発表されたのは1834年5月17日であり、同年の7月31日にメリメは早くも第一回調査旅行に出かけるのである。就任当時、中世美術に関してはほとんど素人に近い状態であったメリメは、この二ヶ月半程の間に必要最小限の知識を身につけたのである。画家であり教育者である父と、やはり絵の心得があり広い教養を身につけていた母によって、一人息子として大切に育てられたメリメは、美術史の研究に必要な美意

識と求知心をごく自然に身につけていた。家庭環境の安定に由来する内面の安定はメリメの性格の特徴のひとつだが、この性格が彼を支えて、古文化財保護という困難な任務を冷静かつ勤勉に遂行するようにさせたのである。⁽⁶⁾

メリメは任務遂行に必要な専門的知識を得るために、前任者 Vitet の指導と助言を仰いだり、英国人の友人 Sutton Sharp に、この分野で当時先進国であったイギリスの研究書を送ってくれるように頼んだりしている。また、フランスで発表されていた中世美術の研究書も読んでいるが、そのなかにはおそらく、Arcisse de Caumont の *Histoire de l'architecture religieuse et militaire* もあった。この de Caumont 宛の手紙の中には、メリメの古文化財保護思想の出発点を示す言葉が見受けられる。《Les réparateurs sont peut-être aussi dangereux que les destructeurs. (C. G. Vol. I p. 289)》これはユゴーが『ノートル＝ダム・ド・パリ』の「ノートル＝ダム」の章で展開する議論とも呼応しており、革命時の古文化財破壊を憂える、という段階から一歩進んだ中世美術認識を示している。ユゴーの場合、古典主義的建築美学批判を鮮明に打出した華麗な中世讃歌となっているが、それに比べてメリメは、そのような華やかさはないものの、正しい修復保存実践のために、実証的な研究による正確な中世美術理解を確立しようとするのである。中世美術研究の専門的学問的な成果を理解把握し、それを専門外の人々に伝え世論を啓蒙する、といういわゆる vulgarisateur としての役割をメリメが引き受けるのである。歴史記念建造物総監督官の任務は中世美術に対する役人、知識人を含む一般の無知との闘いであった。

もっとも中世美術への関心が高まり、その研究が盛んになることがそのまま正しい修復に結びつくわけではない。メリメの言わんとするところは、生半かな知識による修復が最も危険だということである。だからメリメは、古文化財の保護事業は国が主導し、専門家の手によって慎重に行うべきだと考える。や

はり de Caumont にメリメは言う。⁽⁹⁾

J'ai demandé que toutes les réparations, projetées pour les monuments historiques, fussent soumises au conseil des bâtiments civils avant d'être mises à exécution. (C. G. Vol. I p. 289)

le Conseil des Bâtiments civils（公共建築評議会）はその建築家スタッフをローマの l'Académie de France の寄宿生（ローマ大賞を受けた学生）から採用しており、当時としては建築の専門家を擁する行政部門であった。⁽¹⁰⁾ メリメの文化財保護の基本方針は、国による管理と、専門の技術者による修復作業の実践であった。メリメはこの二つの方針にあくまで忠実であった。だから、後になって le Conseil des Bâtiments civils 公認の建築家が、古典主義的建築理論に基づいた教育を受けており、中世建築の専門家として不適格だと判断すると、メリメは上述の基本姿勢を貫き、Vézelay の Madeleine 寺院の修復工事に Violet-le-Duc を抜擢する。Violet-le-Duc が中世建築の科学的理論的研究を、古典主義建築理論に批判的な観点に行き、フランス建築美学の革新を成し遂げたことは有名だが、その源流にはメリメの文化財保護思想に表現されているような自由主義的ロマン主義と共通する合理的精神があったのである。

メリメは1860年まで歴史記念建造物総監督官の職にあり、十九世紀フランスにおける中世再認識と古文化財の保護に貢献した。メリメの仕事の内容を大別すると二つある。ひとつは、実際の修復事業とその実行の為の中央関係諸官庁および地方自治体との折衝である。そこには、メリメの古文化財保護思想が具体的な形で表われていると思えるのだが、政府内の報告書等が一次資料になるので、その検討は我々にとって容易とは言えない。⁽¹¹⁾ メリメの仕事の第二は、第一の仕事を有利に進めるという戦略的な目的も持った、中世美術の啓蒙書の執筆、刊行である。この方面でのメリメの業績に関しては、Pierre Josserand が *Etudes sur les arts du moyen âge* と題して Flammarion 社から、また、

調査旅行記を Pierre-Marie Auzas が *Notes de Voyages* としてまとめ、メリメ没後百年を記念して Hachette 社から刊行した現行版があるので、その概要を知ることができる。

我々が本論次章以下検討する *Essai sur l'architecture religieuse au moyen âge particulièrement en France* は Josserand の解説によると、la Société de l'Histoire de France 刊行の *L'Annuaire historique pour l'année 1838* に収録されて 1837 年 Renouard 社から出版されたということである。また Parturier の編集したメリメの書簡集の年表には 1837 年 5 月脱稿とある。とするこの論文はメリメのオーヴェルニュ地方調査旅行（1837 年 5 月 25 日から同年 8 月 18 日まで）以前に書かれたことになる。それまでにメリメは、監督官就任の年 1834 年に南部地方、翌 35 年に西部地方、36 年にアルザス地方と三度の調査旅行を済ませており、*Notes d'un voyage dans le Midi de la France* (1835 年 7 月) と *Notes d'un voyage dans l'Ouest de la France* (1836 年 10 月) を発表している。⁵⁰ この論文に、我々は、メリメの中世美術、特に中世宗教建築に関する 1837 年の段階での基本的な考え方を見ることができるのである。

II. 中世建築の再評価とメリメの合理主義

メリメは、*Essai sur l'architecture religieuse du moyen âge particulièrement en France* の中で、フランスという国の形成を十世紀末つまりカペー朝の成立時とするギゾーの言葉を引用し、フランス国民史の始まりとフランス最初の国民的建築様式であるロマネスク様式の誕生とを重ね合せる。ローマ帝国の滅亡後長い間低迷状態にあった建築芸術が、経済的、社会的、技術的条件の成熟した十一世紀に再興した。ただこのロマネスク様式は、単なるローマ建築の模倣ではなく、東ローマ帝国やサラセン帝国の建築、時代や風土、国民特有

の趣味などの影響を総合し、さらにはそれ自体が神学思想の表現でもあった中世独自の建築様式なのだ、というのがメリメの主張である。つまりロマネスク様式は過去から学びそれを現代に生かすことによって生れた、と考えるのである。このような過去に対する態度には、革命と伝統の調和をめざす自由主義の歴史観を見ることができる。またその根底にある十九世紀的な歴史感覚は、歴史研究と実用性を結びつけようとするものであり、それが、たとえば建築における過去の様々な様式の再興といった現象を引き起こしたのではなかろうか。

ところで、このように歴史的に位置づけられた中世建築を、メリメは感性によってではなく理性によって評価しようとする。これは理性を重んずる古典主義建築理論にやはり理性を持って対抗する、つまり、古典古代の建築の合理性を認めると同時に中世建築の合理性をも評価するという立場である。この見地からメリメは中世建築に古代建築と同等の評価を与える。そしてメリメのこの論文の主要なテーマであるロマネスク様式とゴシック様式の比較、その変遷過程の記述において、中世建築の合理性に光を当てるのである。

ロマン主義時代の中世趣味の流行によって中世建築への関心が高まっていたとはいえ、一般にはそれはまだ趣味の域にとどまっていた。また、古典主義、合理主義の伝統が支配的であったフランスでは、中世建築は非合理的なものであるが故に醜いものであり従って価値のないものだと思なす傾向が強かったように思われる。後年メリメは、スタンダールの中世建築嫌い、ルネサンス好みを指摘し、そこにある中世建築に対する態度は、ロマネスク様式とゴシック様式の内的法則を理解せずアプリオリに美醜の判断を下すものだとして批判している。⁶⁹ この傾向に対立するロマン主義的中世美術崇拜は感覚的なものであったが、メリメは合理的か否かということと美醜の問題とを切り離すことで、独自の中世建築評価の基準を提出したのである。このメリメの態度には、本質的には古典主義的教養に支えられた美意識を持ちながら、その美意識と一見相反する中世

建築の再評価と取組まなければならないという葛藤が見られると思う。この葛藤は、ロマン主義運動の中にあっても生命力を失わない合理主義に内在するものであろう。もし合理主義というものがいわゆるブルジョワイデオロギーの核をなすものであり、またフランス国民史の確立が十九世紀フランスのブルジョワジーにとって重要な意味を持つならば、中世建築の合理的解釈は自由主義者メリメにとって是非とも果さなければならない使命であった。中世建築が無知や気紛れの産物ではなく、その根底に正確な知識に裏づけられた合理的精神が存在することを示す必要があったのであり、それ以外の方法で、中世建築に対する評価を古典古代の建築と同等あるいはそれ以上に引き上げ得たとしても、メリメにとってはあまり意味のないことだったのではなかろうか。

もっとも、本論で検討中の論文をメリメはより具体的で限定された目的を持って書いた。その最大のものは、少なくとも様式の識別ができるくらいまでに一般の中世建築に対する理解を深めることであった。それは、メリメ自身が歴史記念建造物総監督官としての任務を遂行するためにも不可欠な知識であった。⁶⁴ しかしながら、この識別のためにメリメが当初参考にしていたであろう de Caumont などの研究には、1837年のこの論文執筆時にはすでにそれが十分に合理的でないとの理由で不満を持っていたようだ。藤本康雄氏は次のように言ってこのメリメの論文をフランス中世建築研究史の中に位置づけておられる。「メリメの論文は〔中略〕コーモン等の考古学的研究と、ヴィオレ・ル・デュック等の実践建築学的研究との中間の美術史的立場によって、前者の補遺、後者の誘導の役割を果たすと見られるのである。」⁶⁵ この考古学的研究とは、メリメが、

...certains détails, dans lesquels plusieurs antiquaires ont fait résider toute la différence entre le style byzantin et celui qui a succédé et que l'on nomme communément gothique. (Essai. p. 44)⁶⁶

と細部重視を批判しているような、建物の細部の比較による様式の分類整理の方法であったと想像される。それに対してメリメは、様式の生命が細部ではなくその内的法則にあるとする。細部に関してはその多くを先行する建築様式から継承し、それを新しい原理に基づいて再構成することで新しい様式が生れるのである。メリメにとって重要なのは、そのような形で様式の確立を成し遂げたのは中世の建築家の合理的精神だということなのである。

Ⅲ. 中世建築の合理主義的解釈

ロマネスク様式とゴシック様式という細部において共通するところの多い建築様式を容易に識別できるのは、この二つの建築様式が明確に異なった構成原理に従っているからである。

Je me suis proposé ... de montrer comment les deux styles, byzantin et gothique, ... se confondent pour ainsi dire insensiblement à leur point de transition. ... l'art nouveau emprunta tous ses éléments à l'art qui le précéda, et le changement d'un seul principe suffit pour déguiser ces emprunts, et pour former d'une masse de matériaux étrangers un ensemble harmonieux et revêtu d'un caractère original. (Essai. p. 10)

とメリメは言う。もし、ロマネスク様式とゴシック様式の構成原理比較による識別法が確立できれば、それは方法論の問題にとどまらず、無秩序なものあるいは神秘的なものに見なされていた中世建築の独自の合理的整合性を認識する道を開くことになろう。

事実、中世の建築家は、ある原理に基づいて建物全体を構成したのである。メリメの説明をまとめてみよう。中世の教会道の中に入ると、それがロマネスク様式ならば *solidité* を印象づけられるし、ゴシック様式ならば *légèreté* を感じる。これは中世の建築家達がそのような印象を与えるように意図し、ロマ

ネスク様式は *solidité*, ゴシック様式は *légèreté* という原理によって統一されているからである。この原理を実現するために、ロマネスク様式においては、高さに対して幅が広くできており、壁は部厚くさらに控壁によって補強され、空いた部分より詰まった部分が多く、円柱も一般に太く背が低くなっている、全体に水平線が際立った印象を与えている。一方ゴシック様式では、建物の正面が高くなり、建物全体が仰向性を示し、背の高い柱は多くの付け柱によって実際の直径よりも細く見えるようになっており、ヴォールトはその細い柱の上に辛うじて差しかけてあるように見え、窓は大きくなり採光がよくなっている、垂直線が強調されている。このように全体として著しく異なった印象を見る者に与えながら、その細部において多くの共通性を持つのが、ロマネスク様式とゴシック様式なのである。メリメは以上の説明のあと、《*En un mot, chaque travée, dans les deux styles, se compose des mêmes éléments: seulement dans l'une le but des architectes a été la solidité; dans l'autre la légèreté. (Essai. p. 46)*》とロマネスク様式とゴシック様式の相違を簡潔かつ見事にまとめている。

このような様式変遷の流れの捉え方には、人間は過去から様々なものを学び取り、それを理性によってそれぞれ自分達の時代に生かしながら自らの歴史を創り出してゆくのだ、という歴史観の反映を見ることができる。メリメはそのような歴史観によってロマネスク様式からゴシック様式への移行を強引に説明してしまった、という感がなくはない。しかしメリメの採用した方法論はやはり有効だったと思う。ロマネスク様式とゴシック様式が、それぞれ合理的精神に裏づけられた思索と実験の繰り返しによって完成されていったこと、そしてゴシック様式がロマネスク様式から多くのものを継承したことは間違いないからである。

ところで、中世建築の合理主義的解釈は、むしろメリメの独創ではなく、自

由主義的ロマン主義者達の共同作業であった。革命以前の過去と現在とを結びつけようとする自由主義者達の歴史研究は現在への応用と結びついていたのである。中世建築そのものの研究に関して言えば、メリメの進めた方向の延長線上に、Violet-le-Duc が完成した中世建築解釈があり、それは十九世紀建築理論に大きな影響を及ぼしたのである。Violet-le-Duc の理論は、ここでは詳述できないが、要するに中世建築特にゴシック建築が力学的整合性を持った構造体であると証明したものである。⁴⁴⁾ それは中世建築の合理主義的解釈を極限にまで推し進めたものだった。

メリメのオジーヴ解釈はこのような方向での中世建築認識を示唆するものである。オジーヴといっても、arc brisé という語を併用していることから分るように、メリメは半円アーチに対する尖頭アーチの意味でこの語を用いている。当時から半円アーチと尖頭アーチという形態的な特徴を基準とし、尖頭アーチを持つものをゴシック様式、半円アーチを持つものをロマネスク様式とする説があり、ある意味ではそれが通俗化していた。我々は、たとえば、ユゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』の中の「ノートル＝ダム」の章などによって当時の尖頭アーチ解釈を窺い知ることができる。それはどちらかというと審美的な解釈であって、メリメはそれに対して異議を唱えるのである。

Pour nous, l'ogive est un élément d'architecture applicable à plusieurs styles, mais qui n'est caractéristique d'aucun. [...] L'ogive est un moyen, non un système. (Essai. p. 50)

確かに、ゴシック様式が半円アーチを全く使わない訳ではないし、ロマネスク様式にも尖頭アーチの使用例は見られるのである。その意味ではこのメリメの意見は正しいであろう。尖頭アーチの形態的特徴のみをもってゴシック様式を識別する基準とするのは無理だと思う。ただ、ゴシック様式において尖頭アーチが多用されたのは事実である。この点に関してメリメは、ゴシック様式の建

築家達が尖頭アーチの機能をよく理解していたことに注目する。尖頭アーチ導入の理由はその実用性にある、という論を展開するのだ。ここで我々は、メリメの説を検討する前に、現代の建築史家の説明を参照してみよう。

「ゴシックでは各種アーチを用いたが、最も盛んに使用したのは尖頭アーチで、スパンよりも直径の大きい2本の円弧を交差してつくられる。ロマネスクで慣用された半円アーチでは起拱点（アーチやヴォールトの起点）から立ち上がった視線は頂点で水平となり、対向側の起拱点に導かれて完結する。これに対して尖頭アーチをたどる視線は頂点を越えてさらに立ち上ってゆくような印象を与えられる。またこのアーチは張り高さを自由にできるのでスパンの異なるアーチを組合せて使用する場合、頂点の高さをそろえられるという利点を持つ。さらに半円アーチに比べて推力が小さいという長所も理解されていたようだが、これはあまり重視されなかったらしい。」⁹⁹

この解説にある尖頭アーチの特徴のうち、メリメはまず「尖頭アーチは張り高さを自由にできる」という点を尖頭アーチの長所とするのである。メリメの説明をまとめてみると次のようになる。半円アーチを用いるとそのアーチの高さはアーチをかける柱の間の幅によって決ってしまう。すると強度の点から柱の間の幅を狭くする必要がある部分、たとえば内陣の半円平面部などでは、アーチの高さは他の部分より低くなる。高さを揃えようとするとアーチは半円でなくなるわけで、構造上の欠陥が生ずる。この問題を解決するのが尖頭アーチなのである。メリメは言う。

L'ogive remède à tout, en permettant à la fois de reproduire des courbes semblables et de conserver la hauteur désirée. (Essai. p. 52)

このメリメの説明は完全なものではないかもしれないが、上の説明と比べて見てもほとんど問題がないと言ってよかろう。

次に、「半円アーチに比べて推力が小さいという長所」に関しては、メリメ

もやはり、尖頭アーチは半円アーチよりも抗圧力という点で有利であるから、スパンの非常に大きいアーチをかけるときには尖頭アーチが好んで用いられた、と言うのである。メリメの主張は一応当を得たものだと思うが、ただメリメが上の解説にある推力という概念をどこまで正確に理解していたかは定かではない。メリメはこの意見を実例を見て確認したのであろうが、アーチの高さの問題の時とは違って、なぜ抗圧力の点で有利であるかの説明がないからである。また上の解説にもあるように、中世における尖頭アーチの使用理由の説明においては、推力の問題をあまり重要視できないということも現在ではある。

もっともこの推力 *poussée* というのは中世建築の解釈上の大問題であって、ゴシック建築の三大要素とされる尖頭アーチ、リブ・ヴォールト、飛梁は、この推力の問題の解決策として建築史家が注目してきたのである。⁶⁴ なかでも、我々の目にもつきやすく、また実際に効果的に機能しているのが飛梁 *arc-boutant* である。それと控壁 *contrefort* については、メリメも次のように言及している。

... pour soutenir en l'air des voûtes à une prodigieuse hauteur, on dut augmenter successivement les contreforts; il fallut étayer de tous côtés, par des arcs-boutants, ces masses pyramidiales... (Essai. p. 54)

しかしながらメリメは、この飛梁や控壁を必要なものではあるが教会堂の外観を損うものだ、と考えている。Violet-le-Duc が尖頭アーチ、リブ・ヴォールト、飛梁、控壁などの構造力学的機能を理論的に解明しようとし、ゴシック建築の力学的に完全な構造を理想化して、そこに機能美を見たのに比べると、ここでのメリメのゴシック評価はそれほど積極的なものとは言えない。尖頭アーチを *une espèce de pis-aller* とし、半円アーチを *noble* (Essai. P. 52) としていることなども考え合わせると、メリメの美意識はむしろロマネスク様式を好んでいたように思えるのだ。ロマネスクかゴシックかという選択は個人や時

代の趣味の問題でもあろうが、ここではゴシック建築に対する合理的解釈の徹底とも考えられ、メリメのこの論文が中世建築の合理主義的解釈としては過渡的なものであったことを示すものでもある。

とは言え、メリメが中世建築の合理性を評価する点で先駆者の一人であったことに変わりはない。最後に、十九世紀的歴史感覚と結びついたメリメの合理主義の好例であるゴシック様式の明解な定義を引用しておこう。

L'art gothique parut avec un système nouveau: il choisit dans l'architecture romane, s'appropriä les éléments déjà en usage et les perfectionna tous; il sut composer un ensemble de ces éléments et l'on eût dit qu'il les transformait en le mettant en œuvre. (Essai. p. 53)

時代的な制約はあったにせよ、合理主義者メリメは中世建築再認識の運動において大きな役割を果たしたのである。

結 び

十九世紀はロマン主義の時代である。そして、メリメはフランスロマン主義の最盛期1820年代に精神形成を終えた作家であった。ロマン主義的精神はメリメの思想に少なからぬ影響力を持ったのである。しかしメリメは合理主義者でもあった。メリメが、特にその晩年、新しい文学を理解しなかった理由のひとつにその合理主義的精神があげられると思う。このロマン主義と合理主義との関係はメリメ研究において重要な問題となろう。そして注意すべきは、当然ながら、ロマン主義が合理主義を凌駕したと単純に考えられないことだ。メリメの合理主義はブルジョワ自由主義と密接につながっていた。メリメの文学は、たとえばロラン・バルトがブルジョワ的エクリチュールとして批判したものの典型であると言えよう。ロマン主義、合理主義、そしてブルジョワイデオロギーがメリメの思想の特徴である。

これは、本論で検討したメリメの中世建築の合理主義的解釈の近代性に端的に現われていることである。中世建築をその内的法則によって理解する態度や構造力学的アプローチは、不十分なものであったかもしれないが、一応評価してよいと思う。もしメリメの進んだ方向に根本的な問題があるとすれば、それは十九世紀的近代の合理主義に内在するものだと考えられる。もっともこの点に関して我々はまだ結論を出すことはできない。解決すべき疑問点が数多く残っているのである。たとえば、同じ合理主義路線だと思える新古典主義との関係、逆に、文学的・ロマン主義的中世解釈であるいわゆる廃墟の詩学との関係、中世建築の合理主義的解釈と文化財の保護修復という現実的な問題との関係、もっと細小なところでは、メリメのロマネスク指向に現われたような、Violet-le-Duc の合理主義的解釈との微妙なずれ、等々。こういった様々な面からのこの問題の検討が我々の今後の課題となるであろう。

メリメ研究に対する筆者の基本的な考えは、ロマン主義と合理主義は切り離すことができないということである。それはまた十九世紀という時代を考える時にもあてはまると思う。その意味で、メリメと中世の問題、さらにメリメと歴史の問題は（十九世紀は歴史の時代でもあり、メリメ自身いくつかの史伝を書くなど歴史に強い関心を示している）メリメ研究の重要な分野であり、これからのメリメ研究は、文学者であると同時に、歴史家、美術史家、政治家であったメリメの全体像を、十九世紀という時代に位置づけながら、捉えていかなければならないと考えるのである。

注

- (1) 本論におけるメリメの手紙の引用はすべて、Prosper Mérimée: *Correspondance générale*, ed. M. Parturier, P. Josserand, J. Mallion, Vols. I-VI, Paris, Le Divan, 1941-7; ed. M. Parturier, Vols. VII-XVII, Toulouse, Privat, 1953-64. からとする（以下 C. G. と略記し、その巻とページを本文中に記す）。
- (2) 本論におけるメリメのこの論文からの引用はすべて Prosper Mérimée: *Etudes*

sur les arts du moyen âge, avertissement de Pierre Josserand, Paris, Flammarion, 1967. に収録されたものからとする（以下 *Essai*. と略記しそのページを本文中に記す）。なお、河出書房新社刊行のメリメ全集 6 に、藤本康雄氏による日本語訳が『フランス中世宗教建築』として収録されている。これは、その註、解説とともに本論作製のために大いに参考とさせて頂いた。

- (3) フランスの古文化財保護事業とその背景に関しては主に、Paul Léon: *La Vie des Monuments français*, Paris, Picard, 1951 を参考にした。またメリメとの関係については Prosper Mérimée: *Notes de Voyages*, présentées par Pierre-Marie Auzas, Paris, Hachette, 1971 に編者が *Préface* として付した〈Prosper Mérimée Inspecteur général des Monuments historiques de France〉なども参照した。
- (4) Alexandre Lenoir は中世の美術品を蒐集保管した le dépôt des Petits-Augustins の Garde général として中世美術の保存に貢献した（Paul Léon の前掲書 pp. 68-73 参照）。Robert Bachet は、メリメの父が *secrétaire* であった時に L'Ecole des Beaux-Arts が couvent des Petits-Augustins に移転したことに解れて、この中世美術博物館の雰囲気若いメリメに影響を与えただろうと言っている（Robert Bachet: *Du Romantisme au Second Empire. Mérimée*, Paris, Nouvelles Editions Latines, 1958, p. 12 参照）。
- (5) このギゾーの報告書の一部が Auzas の前掲書 p. 8 に引用されている。
- (6) メリメの伝記的事実に関しては、Auzas, Bachet 等の前掲書の他に、Pierre Trahard: *La jeunesse de Prosper Mérimée*, Paris, Champion, 1925; *Prosper Mérimée de 1834 à 1855*, Paris, Champion, 1928; Paul Léon: *Mérimée et son temps*, Paris, Presses Universitaires de France, 1962; Jean Freustié: *Prosper Mérimée (1803-1870)*, Hachette, 1982; Jean Autin: *Prosper Mérimée écrivain, archéologue, homme politique*, Paris, Librairie Académique Perrin, 1983. 等を参照した。
- (7) この年から歴史記念建造物総監督官が誕生するまでの間は、メリメが後年「*grand vaurien*」であった時」と回想する時期である（Lettre à Jenny Dacquin, C. G. Vol. III p. 207 参照）。なおメリメが最初に得た官職は *chef du bureau du Secrétariat général de la Marine* である。
- (8) このような内面の安定とメリメの文学との関連については、梶野吉郎氏の興味深い論文がある（Kichirō Kajino: *La création chez Stendhal et chez Prosper Mérimée*, Tokyo, Jiritsu-shobo, 1980 の中の〈Chapitre premier: Avant la Littérature -Deux Visions du Monde-〉参照）。

- (9) これら二つのメリメの主張は同じ頃チエールに宛てた手紙にも見える (C. G. Vol. I p. 291 参照)。
- (10) このあたりのことは, Paul Léon: *Mérimée et son temps* (前掲書) p. 290 による。
- (11) ただ, Paul Léon の前掲書などの研究書によってその概要をまとめることは考えている。
- (12) 1837年はメリメが *La Vénus d'Ille* 発表した年であり, この小説の語り手である考古学者に調査旅行中のメリメの姿を見ることができであろう。
- (13) Prosper Mérimée: *Henri Beyle -Notes et Souvenirs-*, in *Portraits historiques et Littératures*, Paris, Calmann-Lévy, p. 186 参照。
- (14) Lettre à Adrien de Jussieu, C. G. Vol. p. 315 参照。
- (15) 『メリメ全集 6』河出書房新社, 昭和54年, p. 529。
- (16) 引用文中メリメは *style byzantin* と言っているが, これは藤本康雄氏の註にもあるように (『全集 6』p. 452) ロマネスク様式を指している。当時すでに *roman* が用いられていたようだが (メリメはこの論文で *roman* を使うこともある), まだ用語が統一されていなかったらしい。
- (17) Violet-le-Duc に関しては以下参照した。阿部良雄:「歴史と構造—ヴォレ・ル・デュック試論—連載Ⅰ～Ⅳ」エビスターナー, 朝日出版社, 1978年12月号(Ⅰ); 1979年1月号(Ⅱ); 3+4月号(Ⅲ); 5月号(Ⅳ)。鈴木博之:「ヴィオレ・ル・デュック」(『建築の世紀末』晶文社, 1977年, pp. 107-128)。
- (18) 飯田喜四郎:「ゴシック建築の構造と空間」(『世界の建築, ゴシック』, 学習研究社, 1982年) pp. 99-100。
- (19) 飯田喜四郎, 前掲書 pp. 99-102 参照。また推力(横圧力とも訳されている)は, 次のように定義される。「力学的に, ヴォールトは自ら外に開こうとするので, ヴォールトを支持している両側の壁体や, 大アーケードの柱列などに, 外側向きの水平応力を働かせる。この力を横圧力という。」(神沢栄三氏他共訳のアンリ・フォション:『ロマネスク—西欧の芸術 1』鹿島出版会, 昭和45年; 同;『ゴシック—西欧の芸術 2』昭和47年, に付けられた術語解説の「横圧力」の項) その他, 阿部良雄氏の前掲書の連載Ⅰ, pp. 232 にある 註13 にも推力についての言及がある。